

## シンポジウム

# 「特別の教科 道徳」の今とこれから

### 【シンポジウム】

#### シンポジスト

- 宮里 智恵（広島大学教育学研究科 教授）  
中野 敦夫（広島県尾道市立日比崎小学校 教諭）  
岡田 了祐（お茶の水女子大学 IR・教育開発・学修支援センター 講師）  
岡田 博元（お茶の水女子大学附属小学校 教諭）

#### 司会・進行

- 山内 規嗣（広島大学大学院教育学研究科 教授）

実施日：平成 31 年 1 月 6 日（日） 14：10～16：50

場所：広島大学大学院教育学研究科（広島大学東広島キャンパス）L棟 205 号室

#### シンポジウム趣旨について（山内）

特別の教科「道徳」が小学校では平成 30 年度から開始され、中学校でも来年度開始に向けてご準備中のことと思います。先生方が「考え、議論する道徳」の実現に向けて取り組まれ多くの成果と気づきを得ておられる一方、道徳科が以前の特設時間「道徳」とどのように異なるのか、あらためて問題意識を抱かれたというお話をうかがったこともあります。

そこで本シンポジウムでは、(1) 特別の教科「道徳」についての基本的理念と現状認識を共有し、(2) 「道徳」の最新の実践とその背景・意義についてのご発表から「道徳」の可能性を探り、(3) 「道徳」実践にあたって学校の先生方が抱かれている現実的な課題や悩みなどを提示いただき、その解決・軽減に向けた方策についての意見交換を通して具体的な手がかりを検討することを、目標とさせていただきます。

そのためにまず宮里智恵先生・中野敦夫先生から議論の中心軸として、「道徳」の意義・目標や今後の重点、広島県の方針、そしてこれらに沿った「道徳」の最新実践についてご説明をいただきます。

続いて岡田了祐先生・岡田博元先生からお茶の水女子大学附属小学校の独自教科「てつがく」の実践とその理論基盤をご紹介いただき、道徳教育の多様な在り方や可能性について考える視点を共有したいと思います。

#### 特別の教科『道徳』の今とこれから

##### —教科になった道徳とは—（宮里智恵）

教科への議論の発端には大きく 2 つの側面があります。まず、子供たちの間で繰り返されるいじめの問題を受けて、子供の心を育てる道徳教育のあり方を根本から見直す必要が指摘されました。次に、変化の激しい予測困難な時代の到来により、これからの児童生徒には、現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性のある力が必要となります。他の教科等と同様、道徳教育にもそうした力の育成に大きな役割を果たすことが期待されているのです。

これらを背景に、学校における道徳教育には「自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できるようにする」という改善の方向性ととも、授業に

ついても次の2点が示されました。①主として検定教科書を用いる、②道徳科の授業を継続して行う中で、子供の学習状況及び道徳性に係る成長の様子を見取り、評価する。

こうした方向性が示されたのは、これまでの道徳授業に次のような課題が見られたからです。

- ・読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏った形式的な指導
- ・単なる生活経験の話合い
- ・望ましいと思われることを言わせ書かせる

もちろん全ての道徳授業が該当するわけではありませんが、道徳授業の固定化形骸化は以前から指摘されており、最大の問題は「子供が価値について主体的に考えているか」「子供の道徳性を育てる授業になっているのか」です。子供の道徳性を育てるために行う以上、子供が主題について主体的にしっかり考えることで道徳性の伸長が図られる授業を創っていくことは、ごく当然のことです。これからの道徳授業にはそうした質の転換が求められているのです。

平成27年に示された小中学校の学習指導要領解説特別の教科 道徳編の「『多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である』(答申)ことから、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な問題を一人一人の児童(生徒)が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』『議論する道徳』へと転換を図るものである。」という表現は、上述のことを踏まえると示唆に富んでいます。すなわち、次代を生きる子供たちは、これまでとは比較にならないほど大きなグローバル化、情報化の時代を生きます。多様な価値観が存在する社会の中で、特定の正しさに固執せず、この場合はどのように考えることがここにいる皆にとって平和的な解決になるのか、と常に各人が考え、相互に議論することを通して答えを生み出すことになります。自分はどうすべきか、自分に何ができるのかを判断し、実行の手立てを考え、実践できる自立した個人が求められるのです。

今回の学習指導要領改訂で「主体的・対話的

深い学び」への転換が図られるにあたり、道徳科ではその姿は「考え、議論する道徳」とされています。考え、議論することによって最もふさわしい価値の捉え方を共有する時間が道徳科の時間ですので、「考え、議論する」は授業の方法であって、目的ではありません。

考え、議論する道徳科の授業像を、道徳科の目標と合わせて考えてみましょう。道徳科の目標は次の通りです。( )内は中学校の目標。

よりよく生きるための道徳性を養うため、  
道徳的諸価値についての理解を基に、  
自己を見つめ、  
物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、  
自己の(人間としての)生き方についての考  
えを深める

学習を通して、

道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育  
てる。

あえて分節して示しましたが、道徳科の授業像は上の枠内です。上の枠内の一つ一つを意識した授業の過程に、子供が考え議論する場面が現れます。そしてその結果、下の枠内にある道徳性(道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲と態度)が伸長されることになるのです。

道徳が教科化されて小学校では間もなく1年、広島県内の様々な学校では明らかに以前とは異なる授業を拝見します。教科となった道徳のねらいを達成し子供たちに力がつく授業づくりが職員室の話題になってきた、というお声も聞きます。次に紹介するのは、広島県内で推進され各地域に広がりつつある取組「道徳教育改善・充実」総合対策事業の3メニューです。

#### ①小・中・高等学校道徳教育の実質的充実

「生命尊重や社会性、規範意識等の意識醸成などの今日的課題や各学校段階の指導の重点や特色を踏まえ、小学校・中学校・義務教育学校・高等学校において、近隣校との連携を通して、学校全体で取り組む道徳教育の実質的な充実を図るための実践研究を行う」ものです。ポイントは「全教職

員の共通理解の促進」です。

### ②小中連携による道德教育の充実・発展

「小・中学校段階・各学年段階において、より効果的な指導が行われるよう、児童生徒の発達の段階及び地域等の実情を踏まえ、異校種や同校種間等との連携による創意工夫を生かした道德教育を推進するための実践研究を行う」ものです。ポイントは「道德教育の連続性・一貫性の確立」です。

### ③学校・家庭・地域の連携による道德教育の充実・発展

「小・中・義務教育学校が、家庭や地域と一体となった体験活動を行う中で、児童生徒の自尊感情を高め、社会参加の意欲や態度など豊かな心を育てるとともに、生徒指導上の諸問題の未然防止にも資するよう、学校と家庭や地域との連携による道德教育を推進するための実践研究を行う」ものです。ポイントは「学校・家庭・地域の一体化」です。

今後の課題としては、教科になった道德を一層充実させるために、指導と評価の一体化が重要です。授業の質的転換とともに、児童生徒の学習状況と道德性に係る成長の様子を、長いスパンで見取るための工夫が必要と思われます。

## 教科科に沿った「道德」の実践（中野敦夫）

以下は、広島大学教職大学院で行った小学校中学年道德科の「相互理解、寛容」を主題とした授業づくりの最新2年間の実践研究成果です。

### ①児童が自分事として考えられる教材づくり

中学年児童には、身近に起こる出来事が自分事として考えられる題材になると考えました。そこで児童にアンケートを採り、児童がこれまで許すことができなかつた出来事やその時の相手、場面などをリサーチしました。それらのデータをもとに教材を作成し、授業を行いました。授業では、感情的になり、許したいけど許せない主人公の気持ちに共感しながら、許すために必要な心について考えることができました。

### ②主題の順序性に着目した授業づくり

「寛容」を主題とした実践研究授業のさい、その価値について捉えることができた児童は半数以下でした。そこで「寛容」の基盤と考える「相互理

解」についてまず授業を行い、その価値について捉えさせた上で「寛容」を主題とした授業を行い、その有効性を検証しました。

結果として、「相互理解」を主題とした先行授業において、対話を通して互いの立場を知り相手を理解することの大切さを捉えた児童が、その後の「寛容」を主題とする授業では、相手の立場に立って考え相手を尊重することの大切さを捉えることができていました。このことから「寛容」の基盤となる「相互理解」のよさや大切さをまず捉えさせることが、「寛容」を育てる上で有効であると明らかになりました。

### ③「相互性」に着目し、他の内容項目と関連させた授業づくり

「友情、信頼」を主題としながら、「相互理解」が友達関係づくりに大切であることを捉えさせる授業を行い、その後「相互理解」を主題とした授業を行うことで、児童に効果的に「相互理解」のよさや大切さについて捉えさせることができるのか、その有効性を検証しました。

「友情、信頼」を主題とした授業では「ないた赤おに」を教材とし、赤おにと青おににはお互いのことを考える思いに差があることに気付かせ、そのような状態で友情は成り立つのか考えさせました。児童は、よい関係をつくるには、お互いを同じくらい理解し大切にしようとする気持ちが必要であることに気付きました。そのうえで次の「相互理解」を主題とした授業では、相手の立場に立って考えることの大切さについてさらに考えを深めていくことができました。

### ④教育現場における道德科の課題

まず、「道德の授業はこうあるべき」という型にはまった授業がまだ多く見られ、そこからの脱却が必要と言えます。その一方、若手教員からは、道德の授業をどのように作っていけばよいのか分からないという声も多く聞かれます。

次に、議論だけで終わってしまう授業が多く見られます。児童の意見交流は活発に行われますが、その後の道德的価値について考え、深める学習活動が見られないまま、教師がまとめるといった授業の流れになっています。

最後に、評価方法や評価材についての悩みが多く聞かれます。特に低学年の児童は、話す、書くなどの言語表現がまだ難しく、評価の難しさが指摘されています。

### 新教科「てつがく」の特質と意義（岡田了祐）

学習指導要領において、道徳教育の目標は次のように示されています。

（前略）自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする。

そのための時間として、一般的に学校の教育課程では道徳科が設定されています。

一方、現実社会やそこで生きていく子どもたちの課題をどこに見だし、教育目標の具体的な重点をどこに置くかによって、このような道徳性を涵養するための教育は、様々な姿を採ることができるとも考えられるでしょう。そのような試みの一つとして、お茶の水女子大学附属小学校では、新教科「てつがく」を創設し、実践を蓄積してきています。

道徳科と「てつがく」は、学校の教育課程の中で価値を扱うという点で共通する一方、扱う価値の性質とその扱い方に相違があります。

従来の道徳の時間では、典型的には、徳目やエピソードなどを通じて、伝統的に形成されてきたある一つの価値を再確認し、一つの望ましい生き方を指導することが行われてきました。しかし、それは価値注入であるという批判も根強く、道徳科では、できるだけ多様な価値を示したりすることが実践されてきており、道徳教育に関する改革が進んできております。他方、これらは、個々人の外にある価値を扱っているという点において共通していると考えられます。道徳科で価値の内容項目を四つの視点と学年段階と整理することによって、系統的に編成し、指導することができるのもそのためです。

それに対して、「てつがく」では、個々がもっている経験を他者と共に議論し、吟味する中で、共

通了解をつくっていくことを試みようとしており、これは、個々人の内にある価値を扱おうとしています。「てつがく」は、学問の名称を教科名に冠してはいますが、哲学の体系的知識を学ぶものではなく、様々な価値や概念と向き合い、対話や記述などの言語活動を通して、問い直し、考え続けるという学びです。そのため、「てつがく」の学習で扱う価値は、子どもたちから挙げられた話題や問いから立ち現れてくることが多く、それを探究する中で、複数の価値を架橋するものとなっています。

具体的に「てつがく」をみていきましょう。その目標は、次のように設定されています。

自明と思われる価値やことがらと向き合い、理性や感性を働かせて深く考えねばり強く問い続けたり、広く思いを巡らせ多様に考えたりすることを通して、民主的な社会を支える市民の一人として、創造的によりよく生きるために、主体的に思考し、前向きに他者と関わる市民性を育む。

これは、「～を通して」で二分でき、後半の部分が目的である具体的な育成したい市民像であり、前半の部分がそれを実現する手段、つまり、実質的に「てつがく」で実践しようとしていることと解されます。現代社会は、不確実で予測不可能なことも多く、複雑化する状況の中で、正解のない問題に対応していかなければならない社会です。そうした社会では、物事を自明視しない、粘り強く問い続ける、多様に考えるといったこと、すなわち、考え続けることによって自分なりの意見をもつことが重要となります。その際、自分とは異なる経験や価値観をもつ他者との対話によって、考え続けることが可能となるため、他者の存在は欠かせないものです。そして、この他者とともに対話し、ともに考え続けること自体が、社会をつくっていくことであると言えます。「てつがく」では、現代社会における市民の育成を念頭に置き、不良定義問題を考え続けることを実践しながら、（他者とともに粘り強く）考え続けようとする習慣を涵養することをねらっていると言えるでしょう。

このような習慣は、道徳性の中でも特に公共性の一つであると捉えられます。公共性は、例えば「身の回りのひとに親切にする」(規範を遵守する)、「選挙に行って投票する」(行動する)などのバリエーションが想定できますが、「他者とともに考え続ける」(思考する)というのもその一つであると考えられます。また、公共性は、お茶の水女子大学附属小学校が長年蓄積してきているシティズンシップ教育の研究・実践の中核でもあり、シティズンシップ教育と「てつがく」の連続性が見て取れます。

上記の目標を達成するため、次のような内容・方法とそれぞれ不可分に結びついていると考えられます。まず、内容は、①多様な思考の場、②他者との関わり、自己の在り方の追究、③共同体での探究と問い続ける姿、が設定されており、これら「考え続ける」という行動の必要な条件そのものを取り扱っています。また、方法は、実践事例から、日常の中にある概念を他者とともに使用したり、問いを投げかけ合うことを行っていることが読み取れます。

「てつがく」は、学校の教育課程全体から見れば、「てつがくすること」を通して全ての教科と関連づけられ、教育課程上の中核的役割を担うものとなっています。お茶の水女子大学附属小学校は、「てつがく」を中心に花卉のように各教科を配置し、「てつがく」が生成する“てつがくすること”が薄い光のように各教科に少しだけかかっていることを表した図を作成しています。これは、“てつがくすること”が浸透することで、各教科においても、子どもたちや教師が学ぶ意味を問い直す場となることを企図していると解されます。学校の教育課程の中核に教科が置かれる際、その他の各教科を統合する役割を担う場合が多いかと思えます。しかし、「てつがく」は、学校の教育課程の中で、学習の基盤となる習慣を生成して各教科に浸透させる役割や、そのような習慣に見える化する役割を担っていると言えるでしょう。

#### 「議論する道徳」と「てつがくすること」(岡田博元)

新教科「てつがく」は、平成20年度からのシティズンシップ教育および平成24年度からの新たな低

学年教育課程の創造(サークル対話の導入等)による本校の研究成果をもとに、平成27年度より研究・開発に取り組んできているものです。カリキュラム上は、第三学年以上の各学年で年間55時間(週1時間+朝の時間)を充て、低学年では“てつがくする身体”を涵養する「みがく」の時間を設けています。

「てつがく」では一つのテーマをおよそ3~5時間かけて掘り下げ、その中で一つの問いから複数の価値に広がる可能性を重視しています。そのため、例えば、テーマに即して異なる道徳的価値を組み合わせる複数時間でユニットを組むパターン(1時間目「公正、公平、社会正義」、2時間目「友情、信頼」、3時間目「生命の尊さ」)や、テーマに即して中心となる道徳的価値を他の道徳的価値で補強して複数時間でユニットを組むパターン(1時間目「社会参画と公共心」、その補強として2時間目「個性の伸長」・3時間目「希望と勇気」・4時間目「よりよく生きる喜び」)など、様々なユニット化を行っています。

複数時間ユニットで学習を進めるにあたり、まずテーマについての児童の多様な言葉を相互に関連づけながら整理することで、その学級における「てつがく」の問いの構造を析出します。学習活動はこれに基づいて展開することとなり、同じテーマであっても学級ごとに一つひとつが異なる多様な問いの構造が生まれます。例えば4年生の「大きくなるってどういうことは?」という問いについて対話する児童の言葉からは、「思慮深さ」「追求・選択」「挑戦・達成」「努力・忍耐」「ケア」などの共通点や交錯点が確認できました。それらを学級における共通のテーマとして掘り下げていくことによって、最初の問いは「大きくなるのに関係する気持ち(感情)は?」「チャレンジをやめてしまってもいいの?」などの問いへと変化していきました。この変化の過程こそが、粘り強く思考し「概念を探求する」問いの変化にほかなりません。

また、共通理解を探る学習活動の例としては、5年生の「“こわさ”とは何か」というテーマにおいて、児童がお互いの実感を聴き合い、それらに関係を見いだすことから始まり、“こわさ”について概念

探求する中で、「こわさの大元は何か？」についての共通理解を「想像してしまうこと」に見いだした、という展開が挙げられます。さらに児童らはこの共通理解から、怒られそうな時に「どうして正直に名乗り出ることができないの？」という問いの連鎖を生み出し、この問いをめぐる議論を通して、判断の基準についての新たな共通理解を導き出していました。

これらの事例に共通する児童の学ぶ姿は、議論し考え続ける市民に求められるもの、つまり(1)他者と関わり、自己のあり方を見つめる(2)批判的・多面的・論理的思考を培う(3)共同体での探求と問い続ける姿勢、をそのまま示すものです。学ぶ題材は子どもの言葉と興味・関心から得られ、また題材を通じて複数の価値を架橋できます。そしてこの「てつがく」科を中心とする学校教育を通

して、子どもは視点や場面を変えながら自己と他者、世界を相互に結びつけて探求し、「私」を更新していきます。道徳教育もまた、このような広い視野のもとに包括されているのです。

このような「てつがく」の実行と発展は、教師自身が“てつがくする”ことから始まります。具体的に“てつがくする”とは、題材についての「問いの構造」を広げ、子どもたちに育てたいコンピテンシーが何かを想定し、目の前の子どもの反応や言葉から探求の方向や具体的な問いを絞り、自らの教科観、教育観を問い直す、といったことです。このような“てつがくする”ことを対話的に進めていくことによって、教師もまた教育についての共通理解をつくり出していくことになります。